

サクラ・モモ・ウメ等バラ科樹木を加害する外来種 クビアカツヤカミキリの防除法の開発

1 代表機関・研究統括者

国立研究開発法人森林研究・整備機構 加賀谷 悦子

2 研究期間：2018～2021年度（4年間）

3 研究目的

サクラやモモ等バラ科樹木を加害する外来種クビアカツヤカミキリの被害が拡大していることから、本種の生態・生活環を解明するとともに、化学的・生物的防除手法並びにイノベティブ技術による管理手法を開発し、被害を抑止する。

4 研究内容及び実施体制

① 生態・生活環の解明および化学・生物的防除手法の確立

クビアカツヤカミキリの生態および生活環を明らかにし、バラ科樹木を保護するための防除技術を確立する。

（森林研究・整備機構、徳島県立農林水産総合技術支援センター、栃木県農業試験場、大阪府立環境農林水産総合研究所、日本大学生物資源科学部、農研機構果樹茶業研究部門、埼玉県生態系保護協会）

② イノベティブ技術による管理手法の開発

先端技術を用いて、オンラインマッピングシステムや性フェロモン成分による誘引技術等の効率的な管理手法を開発する。

（森林研究・整備機構、(株)マップクエスト、和歌山県、愛知県森林・林業技術センター、農研機構中央農業研究センター）

③ パンフレット・ウェブを活用した防除法の普及活動

ウェブ上での継続的な情報発信と、防除マニュアルの作成による研究成果の普及を実施し、被害発生地域における啓発活動を進める。

（森林研究・整備機構、大日本除虫菊（株））

5 達成目標

クビアカツヤカミキリの生活環や加害対象樹種等の生態を解明し、化学農薬や生物農薬を組み合わせた防除体系を確立する。また、先端技術を活用したオンライン被害マッピングやフェロモンによる発生モニタリング等の管理手法を構築する。

6 期待される効果・貢献

本事業の成果を被害発生地に普及することにより、クビアカツヤカミキリの被害を封じ込め、根絶へと向かわせることで、サクラが咲き誇る日本の春の風景を守るとともに、果樹生産を安定させることが可能となる。

30023C

サクラ・モモ・ウメ等バラ科樹木を加害する外来種クビアカツヤカミキリの防除法の開発

背景と目的

- ◆ 2012年に愛知県で被害が初確認されて以来、サクラや果樹などバラ科樹木で被害が拡大している。
- ◆ 生態の解明に基づき、化学的・生物的防除法や先進的管理手法を開発し、被害を速やかに抑止する必要がある。



クビアカツヤカミキリ成虫

研究内容(実施体制)

1. 生態・生活環の解明および化学・生物的防除法の確立

生態・生活環の解明

- 飼育や野外調査による生活環の解明
(森林総研、栃木農試、日本大学)
- 接種試験等による加害対象樹種の解明
(農研機構果樹茶研)



飼育系の確立



野外調査

防除法の確立

- 薬剤等を利用した駆除方法の確立
(大阪府環境農総研、徳島県農総セ)
- 成虫及び幼虫への効率的な施用スケジュールの提示
(森林総研、埼玉県生態系保護協会)



天敵微生物の利用

基盤データ提供

2. イノベティブ技術による管理手法の開発

新規防除法の開発

- オンラインマッピングシステム・被害検出法の構築
(株)マップクエスト、和歌山県、愛知県森林セ)
- 性フェロモンを利用した誘引・誘殺
(農研機構中央研)
- 薬剤を用いないイノベティブ防除法の開発
(森林総研)

3. パンフレット・ウェブを活用した防除法の普及活動

継続的な情報発信

- 自治体など管理者向け防除マニュアルと市民向けパンフレットの作成と普及
(森林総研、大日本除虫菊(株))

達成目標

- クビアカツヤカミキリ幼虫および成虫に対する効率的防除法の開発
- 成果の社会実装
- 既存被害地での被害発生阻止および山林等自然生態系への侵入阻止

期待される効果・貢献

- サクラが咲き誇る日本の代表的な春の風景を守るとともに、モモなどの果樹生産を安定させることに貢献